

「音」を感じて

横浜サイエンスフロンティア高等学校一年（神奈川県）

小澤 由莉音

和室でお点前を見る。

多くの人が「静かだ」と感じるだろう。しかし、三年間茶道を経験して、私は「茶道の音」を感じるようになった。

私が茶道を始めたのは、中学一年生のときだ。当初は、お稽古で静かにするのはただマナーだからという理由だけだと思っていた。友達に茶道の印象を聞いてみても、静かで堅苦しいという答えが返ってくることが多い。私は、その印象が理由で茶道への興味を無くしてしまう人がいると思う。しかし、私は彼らに伝えたい。茶道は静かではないと。お点前を見る人が静かにしているのには、ある理由があるのだと。

私が「茶道の音」を感じるようになったのは、掛軸に書かれていた一つの言葉に出会ったからだ。その言葉を知ったとき、釜の湯が煮える音を、風に揺られる木の音と重ねる視点が、きれいだと思った。目の前に森の木々が広がっ

ていく気がした。木々の葉が擦れる音、木漏れ日、葉の香り。私は、初めて音を「感じた」と思った。私があの時に出会った言葉は、「聴松風」だ。

この言葉に出会ってから、私は部活動の時に、心を落ち着かせ、耳を澄ますようになった。そして、気付いた。まるでオーケストラのように、和室では多くの音が奏でられていることに。

襖の開く音で、開演が知らされる。音を一つも聞き逃さないよう、見る者は耳を澄ませる。畳を足が擦る音は、私の胸を高鳴らせる。そして、柄杓を竹の蓋置に置くときの、「カンッ」という音は、私の心を引き付ける。

お点前の途中には、ここには書き尽くせない程多くの音がある。私を楽しませ、癒やしてくれる。最後の、襖が閉められる音を聴く頃には、私の心は充実感で満たされているのだ。これが、茶道をしていて良かったと感じる瞬間だ。

耳を澄ませ、音を感じることに。

これこそが、茶道の楽しみ方の一つであると、私は思う。これらの音は、私の心を和ませ、癒やしを与えてくれる。だから、私は、お点前を見るときは「茶道の音」に耳を傾ける。また、お点前をするときには、より心地好い音を出せるように意識している。

私は、多くの人に、「茶道の音」を知ってほしい。そして、茶道の堅苦しいイメージを変えて、茶道に興味を持つ

てほしい。